

お伽話ときばなしのつくり方

物心ついた頃から童話が大好きだった。

最後に白馬に乗った王子様が、お姫様を迎えに来てくれるお話は、何度も何度も読み返した。

様々な困難を乗り越えた王子様は、深い森の奥で、あるいは塔の最上階で、一目で恋に落ちたお姫様に愛を告げ、その場に跪ひざまずいて結婚を申し込む。

童話のただけに存在する大好きな人——つまり王子様に、小さかった私は憧れていた。

母親から「いい子にしていれば、必ず王子様が迎えに来てくれるのよ！」と言われて、嫌いだったニンジンやタマネギも克服したほど。だって、どこかで王子様が見ているかもしれないでしょう？好き嫌いをする女の子には会いに来てくれないわよ——なんて、騙だまされていた頃が懐かしい。

サンタクローズを疑い始めても、白馬に乗った王子様が迎えに来てくれることだけは信じていた。けれど、残念ながら今まで一度も現れたことはない。

そして私は、王子様なんて本当はこの世にいないんだって、いつしか自分に言い聞かせるようになっていた。

理想と現実とは別だということは、二十九年間生きてきてよく理解したつもり。

でもね、本当は……実は……心の奥の方では、白馬に乗った王子様がどこかに生息していて、私を迎えに来てくれるんじゃないかって思っていたり、いなかったり――

1

「うわあ……これはないわ。もう勘弁してよ……だって、ありえないでしょ、ホント……」

私――春日芽衣子は、どこを向いても同じ道にしか見えない十字路の中心に立ち、ぐるりと周囲を見回した。

手にはGPS機能付きの携帯電話と観光用の簡単な地図がある。

けれど、だけれども……

「ああ、もうダメ、完全に迷った……」

京都は洛中、私は一人旅真つ最中――そして現在地………不明。

基盤の目のように整えられた通りは京都ならではの。すなわち慣れない人間にとっては、どこを歩いてても同じ道にしか見えないということ。

そして、こういう時に限って周囲には誰もいなかったりする。これでは道を尋ねることもできない。携帯電話と地図があればなんとかなると思っていた数時間前の私を叱り付けてやりたいくらいだ。

「うーん、どうしよう……」

ため息をひとつ零して天を仰げば、そこには雲一つない青空が広がっていた。

そもそも、どうして私が地元・東京から遠く離れた京の都にいるのか――

高校、短大と同じ学校だった親友の坂田美咲と旅行の計画を立てたのはつい先日のこと。雑誌に、京都のとある神社のお守りが恋愛成就に効くと書いてあり、それを見た私たちはすぐさま京都旅行を計画したのだ。

即実行に移す、この素晴らしい行動力。もちろんこれは、お互い独身で恋人募集中の身だったからだ。

旅行の目的はある意味寂しいけれど、どうせ行くなら豪華な旅にしよう！なんて盛り上がり、グレードの高い旅館を選んで食事もいいものにした。

ところが、旅行の一週間前――

『聞いて芽衣子、家のない年下の若いオトコを拾って、今日から同棲を始めることにしたの！』

「ど、同棲!？」

嬉しそうな美咲から「脱・独り身宣言」の電話がかかってきた時、私はさーっと血の気が引くのを感じた。

二十九歳となった今、仲のいい友達の中で恋人募集中だったのは私と美咲の二人のみ。だから、拾ったとか、色々すっ飛ばしていきなり同棲とか、そういった細かい経緯はどうであれ、美咲に彼氏ができたということは、とうとうお一人様は私だけになってしまったということだ。

ところがよくよく聞けば、その若いオトコとやらは、段ボール箱に入れられて捨てられていたオスの仔猫だった。

確かに、その仔猫が「年下のオトコ」であることには違いない。正しくは「オス」だけれど。だ

けどこの年になってペットなんて飼っちゃったら、確実に婚期が遅れると思うんですけど……

そして旅行前夜、つまり昨夜。美咲がいつの間にか彼氏と呼ぶようになっていた仔猫のロミオに問題が発生したのだ。

それは、私が旅行の準備を終え、少し早めにベッドに入っとうとうと始めた時のこと。枕元の携帯電話が突然、鳴り響いた。

かけてきたのは美咲だった。ひどく取り乱している彼女からなんとか話を聞き出したところ、仔猫のロミオが食べたものを吐いたうえに、ひどく苦しんでいるという。

救急車を呼んだのに断られたと叫ぶ美咲を、猫相手に当たり前じゃないのと呆れながらも、なだめて落ち着かせ、深夜でも診てくれる動物病院を調べて行くように指示を出した。

ただの食あたりだった、と報告を受けたのはしばらく経った午前一時過ぎ。

そして翌朝、ロミオは退院したものの、心配だから念のため傍にいたい、と美咲は旅行を急遽キャンセルすることになった。

旅行自体を中止にしようかとも思ったのだけれど、今さらキャンセルしたって返金は微々たるもの。それに恋愛成就のお守りをどうしても諦め切れなかった私は、半ばヤケクソで一人で行くことに決めた。

「まったく、何が楽しくて一人旅なんて……でも恋愛成就のお守りは絶対に欲しい……」

そして今、見知らぬ土地で迷子になるという予想外の展開に、身も心もダメージを受けているというわけだ。歩き続けて足が痛い上に、携帯電話のGPSは現在地を把握していないのか、とんち

んかんな場所を表示している。

「これが正しいなら、私は今、郵便局の前にいることになるんですけどっ！」
携帯電話にツッコミを入れても、状況は変わらない。

「ふんっ、いいわ……こっちに行く！」

十字路を直進することにした私はずんと歩いていると、手に持っていた携帯電話が突然震え出した。地図を映していた画面は、着信を知らせる表示に切り替わっている。

「美咲め……」

それは、一人旅の原因を作った張本人からだった。

「もしもしっ!？」

『あ、芽衣子ー？ 今どこにいるの？ 恋愛成就のお守りはちゃんと手に入れた？』

口調も荒く電話に出れば、私の怒りに微塵も気付いていない美咲の間延びした声。それに加えて、仔猫特有のミャオという短い鳴き声が聞こえてくる。アメリカンショートヘアのかわいらしい姿を思い出し、思わずにやけてしまいそうになった私は、慌てて口元をきゅっと引き締め、怒りを露わにした。

「今どこにいるかなんて、私に聞かれたってわからないわよ！」

『は？ —— 芽衣子、ひよっとして迷子？』
うっ。

『やだ嘘っ、ウケるんだけど！』

凶星を指されて言葉に詰まると、それを察知した美咲の笑い声が聞こえてきた。

「だ、誰のせいだと思ってるの!? 元はといえば、美咲がドタキャンなんかするからでしょ！」

周囲に誰もいないのいいことに、私は大声で八つ当たりを始めた。そもそも美咲が仔猫の健康管理に気を配っていれば、こんなことにはならなかったのだから。

『あ、そうだったね。うちのダーリンが迷惑かけちゃってごめんね。でも、一晩入院したからもう大丈夫です。ほーら、ロミオもゴメンニヤーンって謝って』

美咲の声とともに甘えたような鳴き声が聞こえる。元気になったのなら、それはそれで嬉しいのだけれど——

「もうっ！ そんなんじゃ騙だまされないからね！」

『あーほらほら、そんなに怒りっばいと恋人なんかできないぞー。だから会社お局様って呼ばれちゃうのよ。ねえロミオ。これじゃあ社内の男性だつて怖くて近づけないよねえ』

「そ、それは……っというか社内恋愛なんて、周りに筒抜けすぎて怖くてできないし、する気もないから！」

恋人を見つめるのなら、社内で探す方が確かに楽かもしれないけれど、だからといって会社を出会いの場にするつもりはない。

お局様などと陰で呼ばれている私に、そもそも出会いがある気もしない。

それに社内恋愛は色々と面倒が付きまとう——過去に一度、痛い目を見ただけで十分だった。

「私は……社内恋愛なんてもう二度としないって決めたの」

携帯電話を握る手に力が入る。

そう、社内恋愛なんて嫌なことばかり。そして最後には必ず……

治ったはずの傷がちくりと痛み、私は無意識のうちに胸を押さえていた。

『もーそんなこと言ってるから、芽衣子はいくつものチャンスを逃すのよ?』

「へえ、猫を恋人と称して愛でてる美咲が言う?」

『芽衣子だって、馬を王子様と称して愛でてるじゃないの! この前だって馬をうっとり見つめて、私の王子様……なんて呟いちゃって』

「だ、だから違うってば! 王子様は馬に乗ってる人間の方だって何度言えばわかるのよっ!」

そう、あれは数か月前——私はどうしても乗馬クラブの見学に行きたくて、美咲を無理矢理付き合わせたのだ。

もちろん馬を見るためでも、乗馬を楽しむためでもない。もしかして白馬に乗った理想の男性がいるのではないかと思っただから。

三つ子の魂百まで、というのは本当らしく、子供の頃の憧れは大人になっても私の心に強く残っていた。あそこに行けば小さい頃から憧れていた白馬の王子様に会えると、あの時の私はそう思い込んでいたのだ。

とうとう二十九歳の誕生日を迎えてしまつて気が動転したんだと思う。

王子様なんていないって、ちゃんとわかつていたはずなのに……

その時、初めて本物の白馬を目の当たりにした私が、ほんの少しだけ興奮してしまったことを持

ち出して、美咲はしょっちゅうこうしてからかってくるのだ。

『ほら、芽衣子もいい年なんだからさ、白馬に乗った王子様が迎えに来るとか夢見るのはやめて、現実を直視なさい——あつ、やあだロミオだったら、くすぐりたい。うふふつ芽衣子よりもあなたの方が好きよっ』

「……いくらなんでも本気で夢見てるわけじゃない。それに、現実を見る、なんて美咲には言われたくないんだけど?」

現実を見るべきなのは、猫を恋人と偽る美咲の方。

ちなみに、私の「白馬の王子様お迎え説」を知っているのは後にも先にも美咲だけ。こんな子供の夢みたいな話、誰にでも言えるわけじゃない。

「そもそも、私は迎えに来るかもわからない人を待つてなんかいないの!」

『はいはい、それ何度も聞いている。自ら王子様を探しに行くんでしょ? まったく、パワフルなプリンセスだこと。でもそれ、ぜんぜん婚活じゃないからね』

「な……何もしてない美咲よりは活動してるでしょっ!」

『もー芽衣子はさ、年齢の割に若く見られるし、ちゃんと猫かぶつてればオトコが寄ってくるでしょうに。天然パーマが嫌だつて文句言ってるけど、それもかわいい要素のひとつよ? それなのに三十路目前でただで一体何を焦ってるのかしらねえ……はいはい、わかったから。今ご飯の用意するからね、ダーリン』

携帯電話から美咲の足音と冷蔵庫を開ける音が微かに聞こえてくる。

「べ、別に焦ってなんか……」

下を向くと、耳元にかけて長い髪がはらりと落ちた。栗色の髪は美咲に勧められて染めたものだ。ふわふわの髪なんだから色を明るくした方がかわいいと言われて、それからずっとそうしている。

「私はただ……ちよつと、美咲聞いているの!？」

『聞いている、聞いている。じゃ、恋愛成就のお守り、私の分もよろしくね。ついでに絵馬も書いて。希望は年収一千万以上で山手線の内側在住のイケメンってことで』

「は？ えっ……もしもし！ 切れた……もう、信じらんない！」

ドタキャンした上に、他人に自分の恋愛成就を押し付けるなんて……

「美咲のばかっ！ 呪われろっ！」

携帯電話に向かって叫べば、前を歩いていた数人が何事かという顔で振り返った。電話をしながら歩いていううちに、いつの間にか人通りの多い道に出ているらしい。

先ほどまで大声で恋人だの王子様だのと叫んでいたことを思い出した私は、その場から逃げるように近くの森林公園へ飛び込んだ。

偶然にも逃げ場があったことに感謝をしながら。

「あ、この公園って……やっぱり」

公園に設置されていた近隣地図と手元の観光用地図を見比べる。この森林公園を直進すれば、目的地である神社に最短距離で辿り着けるらしい。予想外の近道を見つけて私のテンションはぐつと

上がった。

何としてもお守りを手に入れて、良縁に巡り合わなければならぬのだ。

「よし、待っててねイイ男！」

使命に燃える私は、気持ちを奮い立たせるように呟いてから元気よく歩き出した。

十一月も下旬になると、京都は途端に色付き始める。

見上げると、背の高い木々が全てを覆い隠すように枝葉を伸ばしていた。それでも薄暗く感じるのは、木漏れ日が地面をキラキラと照らしているから。そして、地面には赤や黄色や橙色の絨毯が広がっている。

まるで童話の世界に飛び込んだような幻想的な景色に、私はいつい嬉しくなってしまった。大きく息を吸うと、土と草の香りに身体中が満たされる。

「こんな素敵な場所で、いい出会いがあったりするのよ……」

そう、例えば——よそ見をしていた私がすれ違い様に男性とぶつかってしまい、お互い一目惚れをする、とか。

「ベタだけど、実は一番ドキドキする出会い方よね！」

そんな妄想に花を咲かせていたら、視界の端に何かがちらりと見えた。

はっとして視線を向けると——

「きゃあっ！ わあっ!？」

大きな生き物に驚いて数歩後退したあげく、落ち葉に足を取られてそのままドスンと尻餅をつい

てしまう。

「い、たい……」

地面に打ち付けたお尻をさすりながら自分の運動オンチっぷりにうんざりした。私の運動神経と反射神経は、こういう咄嗟の出来事に対処できないのだ。本当に、勘弁してほしい。

「すみません！ 大丈夫ですか？」

「は、はい……なんとか」

尻餅なんて恥ずかしくない……そう思いながら声のした方向に顔を向けると――

「う、馬!？」

……馬が喋った？

それもただの馬ではない。お伽話に出てくる聖獣ユニコーンのごとく美しい純白の馬が、私の目の前に優雅に佇んでいたのだ。

ぼかんと口を開けて白馬の凛々しい顔を凝視していると、馬の背から誰かがひらりと地面に飛び降りた。落ち着きなく足踏みをする馬の首をポンポンと叩きながら「おちつけ、ムラクモ」と声をかける男性。そして彼はこちらに向き直る。

「大丈夫ですか？ 立てる？」

そう言い、彼は私に片手を差し出した。

短く切り揃えられた髪、切れ長の一重、すっと通った鼻筋――眉根を寄せて心配そうな表情をするその人は、思わず見惚れてしまうような、不思議な魅力を持っていた。

彼の手を無意識のうちに掴むと、そのまま勢いよく腕を引かれた。ぼんやりしていた私は、彼の胸に飛び込む体勢になる。

「ご、ごめんなさいっ」

見上げれば、十五センチくらい上に、彼の端整な顔があった。頭上からは日の光がきらきらと差し込み、よりいっそう彼を美しく見せている。

「……どうやら怪我はないようですね」

彼は私の手をそとと離すと、地面に落ちていた携帯電話を拾った。それは私が転んだ拍子に落としたものだ。

「すみません。曲がり角では一度止まるべきでした」

そう言いながら、彼は帯に挟んでいた手ぬぐいで携帯の汚れを叩き、手のひらに載せて差し出した。その時、私は唐突に気付いた。

「あなたは……白馬に乗って現れるという王子様、なの？」

差し出されたその手に、自分の手を重ねる。

だって、そうするべきだと思ったから――

「……えっと………はい？」

「本当にいたんだ……白馬の王子様……私を迎えに来てくれたのね！」

白馬に乗った王子様なんて存在しないと思っていた。もしかしたらヨーロッパにはいるのかも知れないけれど、ここは日本だ。

けれど夢にまで見た、白馬に乗った王子様が今、私の目の前にいる！

今まで見つからなかったのは——そう、彼は東京から遠く離れた京都にいたからだ。

「あの……本当に大丈夫？」

「はい、もちろん！」

森の中に佇む白馬はまるで絵本の挿絵のように美しい。そしてその白馬に乗って現われた彼はダンスを申し込むかのごとく、私に片手を差し出したのだ。

私はこんな出会いをずっと待っていた。

いつか白馬に乗った王子様が現れて、深い森の奥で、あるいは塔の最上階で、こうして求婚してくれることを——

「あれ……」

その時ふと、目の前の王子様が不思議な格好をしていることに気付いた。

この人は、私がずっと思い描いていた理想の王子様と何かが違っている。

彼の腰には、西洋の剣ではなく反りのある日本の太刀と、数本の矢を収めた筒状の入れ物が提げられている。さらに手に持っているのはシルクのハンカチーフではなく手ぬぐい。

その上、絵本でよく見るカボチャパンツや白タイツではなく、袴姿。極めつけは、大河ドラマで見るような、鎌倉時代とか戦国時代とかの鎧を装着していた。

和装。どう見ても白馬を連れた和装の………武士？

「あ、そっか、日本は昔、武家社会だったから……」

だから和装なのね、と私は悩みながらも理解した。

「まいったな……」

想像と違った和装の王子様をじっと見つめていると、彼は困ったように頭を掻いてきよるきよるとあたりを見回し始めた。

七人の小人たちもいじわるなお義姉さんも、ましてや倒さなければならぬドラゴンもいないはずの公園内を。

「若宮さん、どうしました？」

そこに現れたのは、妖精のおばあさん……ではなく腕章を付けた普通の女性。すると彼はほっとしたように息をつき、その女性に顔だけ向けた。

「……ええ、ちょっと馬で驚かせてしまって、もしかしたら頭を打ったかもしれないです」

「まあ大変。救急車、呼んだ方がいいかしら？」

きゆうきゆう……救急車!?

「わあっ！ あ、あのっ」

はっと我に返った私は、重ねたままだった手をぱっと離した。

そんな私を、彼は心配の色を漂わせた双眸でじっと見つめている。当たり前だ、転んだ後に「王子様」なんて口走る女がいたら、救急車を呼ばれても文句は言えない。

「あ、えっと大丈夫です、本当に！」

白馬に興奮しすぎて、心の声が口から漏れていたことにやっと気付いた私は、それはもう慌てふ

ためいた。

ありえない……私、さっき何て言った？

恥ずかしさのあまり身体中がかあーっと熱くなる。

「あの、頭は大丈夫ですから。馬に驚いて——つい、小さい頃の出来事とか、色々と思いついて」
「小さい頃……？ それは人生の最期に見る走馬灯そうまとうってやつですか？ もしかして馬の脚が頭に？」

彼の手が私の額にそっと触れ、前髪をふわりとかき上げる。

「あの、その、ちよつと——」

「動かないで……」

彼は私の背中の方に腕を回し、後頭部をぺたぺたと触ったり、撫でたり、軽く押し下りして調べ始めた。

「うん、大丈夫そうですね」

「いや、あのっ」

ち、近いんですけどっ！

抱きしめられているような状態にあたふたしていると、ふわりと不思議なお香かぐの薫りに包まれた。それが彼の香りだということに気付いて、私の心臓が暴れ始める。

そんな私の状況に気付くはずもない彼は、そのままの体勢で腕章の女性と一言、二言会話をした。私に怪我がないと聞いた女性が去っていくと、彼は思い出したように私を解放する。

「怪我がなくて本当に良かったです」

「は、はい……あの、お尻は打ちましたけど、頭は本当にいつもどおりですから」

「いつもどおりって……」

彼は我慢ができないといった様子でぶつと吹き出すと、とろけそうなほど甘い顔で笑い始めた。

「あ、えつと、だからそういう意味じゃなくて、ですね……」

「でも王子様がどうかか、お迎えがどうかかって言っていましたけど？」

「そ、それは……」

お願いだから、もう言わないで！

どうしてあんなことを口走ってしまったのか……私は熱くなった頬を両手で隠した。

「それはそうと、ここは関係者以外立ち入り禁止ですけど、あなたもイベントの関係者だったんですか？」

「……え？」

イベント？ 立ち入り禁止？

ふと見回せば、周囲にいる人々はみんな先ほどの女性と同じ腕章を付けている。さらに白馬の他に栗毛の馬も数頭——

イベント……本物の馬……そして武士の格好のこの人……

「ええっイベント!? やだ、ごめんなさい！ 私、全然気付かなくて……」

この現代日本で白馬を連れた武士に出会ったのなら、それは当然、何かのイベントだろう。公園を歩いているうちに、いつの間にか立ち入り禁止の区域に入ってしまったらしい。

「あのっ、色々ご迷惑をおかけして本当にすみませんでしたっ！」
勢いよく頭を下げ、そのままぐるりと踵を返す。

「あ、芽衣子さん!」

名前を呼ばれた気がしたけれど、私は振り返らず、ただひたすら走った。穴があつたら入りたい、そして入ったらそのまま埋めてほしい——そう思いながら。

ぜいぜいと息を切らしつつも、〈関係者以外立ち入り禁止〉の立札を見つけた私は、やっとそこから抜け出した。

「こんな立札、全然気付かなかった……」

深い森の奥で、王子様と運命的な出会いをしたと思つたのに、それはイベントのための白馬と衣裳だったのだ。

「しかもここ、深い森じゃなくて森林公園だし」

息を整え、理性を取り戻せば、そこにはもう恥ずかしさしか残らない。

「王子様、なんて口走つたよ私……死んでしまいたい……」

火照つた顔をパタパタと手で扇ぎながら、私はどこに向かつているのかもわからないまま足早に進んだ。

想像したよりも広い公園内をうろつき、やっと神社への案内板を見つけた時には、すでに二十分ほど経ってしまったけれど、その頃には先ほどのショックも和らぎ、どうにか平常心を取り戻していた。

「そうよね、旅の恥は掻き捨て、つていう素敵な諺があるわ……あの人とはもう二度と会わないんだし、ここは京都なんだから!」

よし、いいぞ私、ポジティブシンキング!

その時、遠くの方から和太鼓の音が聞こえてきた。

それがイベント開始の合図だと知つたのは、前を歩く老夫婦がそう話していたから。

「馬に乗って……矢をね……」

そんな会話が漏れ聞こえてくる。先ほど出会つた白馬の和装王子様のことを言っているのだろう。二度と会わないと思つていたくせに、そのイベントに興味を持った私は、こっそりと老夫婦の後について歩きながら会話を盗み聞きした。

どうやらこれから行われるのは流鏝馬という行事らしい。

二五〇メートルある馬場と呼ばれる直線の道を馬に乗って走りながら、三か所の的に向かつて矢を射る。流鏝馬のほとんどは神社などで神事として開催されるけれど、今日はチャリティイベントとして特別にこの公園で行われる、とのこと。

「なるほど、それであの格好をしていたのね……」

馬を連れ、武士の格好をした彼は、きつと馬上から矢を射る人なのだろう。

「どうしよう、ちよつと見てみたいかも……」

私はびたりと立ち止まり、目の前の参道を見つめた。

この道を進めば、探していた神社がある。旅行の目的地である神社へ行き、絵馬を書いておみくじを引いて、それから恋愛成就のお守りを手に入れる——そのために私はここまで来た。

けれど……腕時計は午後二時五十分。私は迷った挙句、方向転換をして流鏑馬会場に向かうことにした。

「うん、ちょっとだけ寄り道。遠くから見ただけ！ 気付かれなければ別に平気だし……」

そう自分に言い聞かせながら、いそいそと会場に足を進める。

白いロープの外側に設けられた席はすでに満員で、私はその後方で爪先立ちになりながら、馬場を眺めた。

遠くに見えるスタート地点では、すでに白い馬が興奮したように脚を踏み鳴らしている。

乗っているのは、きつとあの人だ……

大きな扇を持つ人がスタート地点の端の方に立つと、それが合図だったのか客席は波が引いたように静まり返った。

ぴんと張りつめた空気の中で、私の鼓動だけがゆっくりと時を刻んでいる。

私は思わず息を詰めて祈るように手を組んだ。

扇が振り下ろされる。途端に馬が走り出した。

ぐんぐんとスピードを上げる白馬。武士の格好をした彼は手綱を放し、腰に提げた筒から矢を素早く抜き取ると弓に番え——そして矢が放たれた。

矢は吸い込まれるようにして中り、的を地面に落とした。

「わ、すごつ……」

周囲から、わつと歓声が上がリ、私の眩きが掻き消される。

彼は落ちた的には目もくれず、また腰から矢を引き抜くと同じように弓を構えた。疾走する馬上で、それもわずか二、三秒の間いだ。

そして私の目の前で、二枚目的に命中させた。そのまま馬は失速することなく走り、彼は最後の的も見事に射落とした。

走り始めてからほんの数秒間の出来事だった。

「な、なにこれ……すごいで……」

もう、すごいでしか言えなかった。

激しい運動をしたわけでもないのに、私の心臓は激しく脈を打ち、アドレナリンが血液中を駆け巡っていく。

きつと美咲が隣にいたら、恥も外聞もなく興奮して大騒ぎしていたと思う。それくらい、誰かにこの感動を、素晴らしさを伝えたかった。

「あの人が噂の流鏑馬王子？」

「そう、通称若様。いつ見てもカッコイいわねえ」

そんな会話が歓声に混じって私の耳に届いた。

「若様……？」

なるほど、王子様ではなく殿様だったらしい。

その後、同じように何人かが馬を走らせながら的を射抜いたけれど、私には白馬に乗った彼の姿だけが強烈に印象に残った。

力強く、素早く、そして一切無駄のない動きで矢を持ち、弓を構える姿——矢が中^{あた}ったあの瞬間を思い出すだけで、私の心に震えが走る。

なんだか初めて恋心を意識したような、少し切ない気持ち。

ああ、これってもしかして……

流鏑馬^{やぶせま}がつつがなく終了した後、私は人の流れに乗って、ふらふらとバザー会場までやってきた。これが世に言うヒトメボレなのか、と気付いたのはつい先ほどのこと。

この年になって会ったばかりの異性にキュンとするなんて、私もまだまだ乙女なのね……なんて思いながら彼の姿を脳裏に蘇^{よみが}らせる。

弓を番^{つが}える時の流れるような動作、馬上での美しい姿、そして凜とした表情。遠くから見ただけなのに、そのすべてが私の目に鮮明に映った。

もちろんそれ以外のことだって私は知っている。彼の笑顔の眩^{まぶ}しさも、笑い声も、力強い腕の温かさだって……

そんなことを考えながらバザー会場を歩いていると、ふと一冊の本が目にと留まった。

「これは……」

見つけたのは子供向けの絵本。白い馬に乗った王子様が水彩で幻想的に描^{えが}かれている童話だった。

私の心を捕まえて離さない憧れのヒト……

「いっさつ、ひやくえんです！」

絵本を手に取り、眺めていた私に話しかけてきたのは、小学校に上がるか上がらないかくらいのお小さな女の子だった。少女の周りには、他にも絵本やヌイグルミがところ狭しと並んでいる。そして、その小さな両手で包み込むように持っているのは、某有名アニメのキャラクターが描かれている缶の貯金箱。

「じゃあ、一冊ください」

腰を落として視線を合わせ、絵本を少し持ち上げて見せる。途端、少女の表情がぱあつと明るくなった。

手渡した百円を嬉しそうに缶の中に納め、カランカランと音を立てながら「おかあさん！」と駆けていく姿がなんともかわいらしい。

私はそのうしろ姿に、ついつい見入ってしまう。

だから、いつの間にか背後に人が立ったことに、まったく気付かなかった。

「嬉しそうですね、掘り出し物でも見つかりましたか？」

「きゃあつ！」

頭上から声をかけられて驚いて立ち上がると、そこには白馬の王子様、もとい——

「や、流鏑馬王子!？」

「その呼び名、何で知って……いや、まいったな」

片手で襟足の短い毛をいじりながら、流鏑馬王子が照れたように呟いた。武士の格好のままだったけれど、腰に提げていた矢筒や長い弓は持っていない。残念ながら白馬もいなかった。それでも素敵なことに変わりはない。

「会えてよかったです。ずっと探していたので」

「え……ええっ？」

会えてよかった？

しかも、私を探していた？

それは、もしかして運命的な何かを感じたとか、そういう類の意味が込められているのでは？

「あ、あのっ、それって——」

「はい、携帯電話。あの時、返す前に走って行ってしまったから」

……違ったらしい。

「あ、ありがとうございます」

私は右手を出して携帯電話を受け取った。ちなみに左手は背中に絵本を隠すので忙しい。子供向けの童話を嬉しそうに買ったなんて知られたくなかった。

「ところで、チャリティバザーで何か買われたんですか？ 随分嬉しそうにしていましたけど」

「うっ……」

後ろ手に持っている絵本に興味を惹かれたらしい彼が、私の背後を覗こうとする。

「いや、あの、たいしたものではないので……」

見せるものかと私は一步後退した。

「見せてくれないんですか？」

「だって、見ても仕方がないですし……」

「あれ、芽衣子さん。顔が赤いけど、どうしました？ 熱でもあるのかな」

ずいと顔を近づけた彼が、私の頬に手を当てた。

「わ、ちょ、まっ……」

驚いてもう一步下がったけれど、それでも手は離れない。私はどうとう我慢できずにくるりと背を向けてしまった。火照った頬に自分の手を当てると、思った以上に熱い。

また会いたい、話したいと思っていた矢先に再会できたのは嬉しい。でも絵本を買う姿なんて見られなくなかった……ちよつとタイミングが悪すぎるでしょ！

これ以上おかしな姿を見られる前に逃げ出さなければ——そう思った瞬間、背に隠していた絵本が、私の手からするりと抜かれた。

「へえ、絵本ですか？」

背中を向けていたせいで、それはいとも簡単に彼の手に渡ってしまったのだ。

「こ、これは、その……」

「隠す必要なんてないのに。そういえば、白馬の王子様がどうか言っていましたね。こういう童話が好きなんですか？」

そう言いながら、彼は絵本をめくり、興味深そうに中の絵を眺めている。

「えっと……………」

何と言ったらしいものか……

返事がないのを不思議に思ったのか、彼は絵本から目を上げて私を見た。そして、答えを催促するように軽く首を傾げる。

純粹な好奇心が浮かんでいる瞳に捕らわれてしまう。

駄目だ、何の言い訳も思い付かない。

私は諦めて真実を告げる覚悟を決めた。

深呼吸、そして――

「あの…………す、好き……………なの……………」

俯いたまま、小さな声で囁いた。

顔が、耳が、全身が熱い。

熱すぎて、恥ずかしすぎて、いつの間にか目にはうつつすらと涙の膜が張っていた。

その時、ばさ、と何かが落ちたような音がした。反射的に顔を上げると、彼は持っていた絵本を地面に落とした状態で、呆然と私を見ている。

ぼかんと口を開けたまま、まるで信じられないものでも見たように目を大きく見開いて。

「あの…………？」

「あ、すみません！ 大切な本なのに」

彼は慌てて絵本を拾い、手の平でパンパンと汚れを叩いた。そして、ちらっと私に視線を投げ――

目が合うと勢いよく逸らす。

ほら、ドン引きしてるじゃないの。

「…………もう、笑ってくれていいんですよ」

むしろ、美咲のように大笑いしてくれた方がまだ救われる。

「あ、いや、そんなことは…………」

「おかしいでしょう？ こんな年にもなって白馬に乗った王子様に憧れてるなんて」

私は差し出された絵本を受け取ると、表紙の王子様を指でそつとなぞった。そこには、王子様がちようど、美しいお姫様を見つけた瞬間が描かれていた。

きつとこの後、彼は跪いて愛を語るのだろう。

「小さい頃、母に読み聞かせてもらってから、ずっと憧れてたんです。あの時、あなたとぶつかった時、白馬を見て一瞬王子様が現れたんじゃないかって思ったりして…………」

こんな話をするつもりなんてなかったのに、私は何をやってるんだらう。

呆れているに違いない彼の顔を見ることができなくて、私はずっと俯いていた。

でも彼は何も言わない。

長い沈黙に耐えられなくなり、私は無理矢理笑みを作って顔を上げた。

「えっと、携帯ありがとうございます。それじゃあ、さようなら」

「あ、待って！」

逃げだそうとした私の腕が掴まれる。

「さつきは逃げられたからね。今回は捕獲成功！」

振り返ると、嬉しそうな表情の彼と目が合った。

「な、何ですか……」

「隠すことなんてないですよ。別にいいじゃないですか、堂々と好きだって宣言すれば。少なくとも俺は、かわいいと思いますよ」

そう言って彼はふわりと微笑んだ。

途端に私の心臓がきゅつと反応する。

「で、でも……」

「でも、じゃないです。ね？」

優しく諭す声は、嘘偽りを言っているようには聞こえなかった。彼は私の感情や理想を否定せずを受け入れようとしている。

それが何故だか無性に嬉しくて、私は黙ってこくりと頷いた。

「そうだ、よかつたら一緒にお食事に行きませんか？ 近くにお勧めのお店があるんです」

話題を変えようとしているのか、彼が唐突に言った。

「お食事、ですか……えっと、はい大丈夫です。このあとは特に予定もないので」

私は腕時計を見ながら答えた。

行く予定だった神社の参拝時間はとうに過ぎているし、このあとは旅館に帰ってのんびり過ごそうと思っていたから問題はない。

「ああ、良かった、断られなくて。誘うの、結構勇気が必要だったんですよ」

息を詰めていたのか、長い息を吐いて彼は言った。

「断るだなんて、そんな……」

白馬の王子様、もとい流鏑馬王子に食事に誘われた——心の中で、じわじわと喜びや期待が膨らみ始めていた。

これがもしも東京だったら、会ったばかりの人に食事に誘われても胡散臭く感じて断ってしまっていただろう。でも……なんととっても、ここは京都なのだ！

少しくらい、冒険してもいいよね？

旅行なんだから、解放的になってもいいよね？

何よりも、彼は、私の恥ずかしい理想の男性像を知っても嫌な顔をしなかった。

ただ、それが純粹に嬉しかった。

「あの……」

お住まいは京都市内ですか、と質問しようとして、私はまだ彼の名前を聞いていないことに気付いた。

「芽衣子さん、湯葉はお好きですか？」

あれ、と疑問に思う。まだお互い自己紹介はしていない。少なくとも、私の記憶の中では……

「どうして私の名前を知ってるんですか？」

「ああ……それは——」

「も、もしかして、私の携帯見たのね！ そうなんでしょ!?」

「え!? ち、違います！ 勝手に人の携帯なんて……あ、ほら、そのストラップ!」

私の携帯電話に付いているストラップは、アルファベットの書かれたカラフルなキューブを数個繋ぎ合わせたもの。そこにはMEIKOの五文字。

「あ、やだ、これ見たのね……疑ってごめんさい」

「いえ、誤解が解けたならなによりです。それじゃあ一時間後に公園の入り口で待ち合わせでいいですか？ 着替えてくるので少し待たせてしまつて申し訳ないけど」

なんだ、着替えちゃうのか。和装が素敵だからもう少し見ていたい気もするけれど、これで出かけたら確かに目立ってしまう。

「わかりました、待つてますね」

そう答えた瞬間、私は大変なことを思い出した。たしか宿の予約の時に――

「やっぱりだめでした！ 私、どうしよう……すっかり忘れてた!」

「このあと何か予定でも?」

「……あの、実は泊まる旅館で夕食を出してもらうことになって……ごめんさい」

しかも豪華な松コース、二人分。

キャンセルしてもお金は返つてこないし、手続きが面倒だからそのままにしていた。

だからもちろん夕食も二人分用意されている。

この時間に電話してキャンセルできる? 私は携帯のディスプレイを見た。

時間的には難しそう。でも、準備してもらつたものを食べないなんて、作ってくれた人に申し訳ないし。……私は彼をちらりと見上げる。

「あの、良かったら旅館と一緒にご飯食べませんか?」

「……いいんですか? 色々……その、まずいと思いますけど?」

「大丈夫です! もともと二人で来るつもりで料理も二人分頼んでたんですけど、友達がドタキャンして、実は私一人なんです!」

これなら料理も無駄にならずに済むし、この人ともゆつくり話ができる!

この名案に、私は小さく勝利のガッツポーズをした。

数時間後に再会した時、彼はカジュアルなジーンズとジャケット姿に変わっていた。それは王子でも武士でもない普通の男の人だった。

彼の名前は若宮梓^{あすき}。

私より二歳年上の三十一歳で、普段はサラリーマンをしているらしい。

当たり前だけれど、普段着は普通なんだなと思つたらおかしくて、私はくすぐすと笑ってしまった。彼が不思議な顔をするものだから、私は思つたままの感想を伝える。

「嫌だな、俺を何だと思つてたんですか?」

そう言いながらも笑みを深めた彼は、自然な動作で私と立ち位置を入れ替え、車道側を歩き出す。一拍遅れてそれに気付いた私は、驚きを隠しつつも、その優しさにドキドキしてしまった。

「梓さん……って女の子みたいな名前ですね。かわいいです」
「ええ、よく言われます」

乾いた笑い声に、私はしまったと思った。男性なんだから、名前が女の子みたいと言われても嬉しくはないだろう。

「でもね、梓って元々は男に付ける名前なんですよ。梓弓あずまゆみの梓……って言ってもわからないかな。まあ、木の種類です」

それでも梓さんは嫌な顔をせず、そればかりか豆知識まで披露して私の気持ちを和らげてくれた。優しい人だなあ、なんて思いながらちらりと隣を見上げる。こちらを見ていた瞳と目が合い、思わず逸そらしてしまった。

「どうしたんですか？」

「いえ……なんでも……」

トクントクン、と緩やかに弾む胸を、私はそつと押さえた。どうかこの胸の鼓動に気付かれませぬように、と願いながら。

旅館に着いて宿泊手続きを済ませ、「桜の間」と表示された部屋へ案内される。到着時間を連絡しておいたためか、八畳ほどの和室にはすでに食事の準備が整っていて、空腹を刺激する焼き魚の香ばしい匂いが漂っていた。

サービスで京都駅から旅館まで運んでもらったスーツケースは部屋の隅に置いてある。何から何まで至れり尽くせり。

そしてこれから、豪華ディナー。

私と梓さんがテーブルを挟んで座ると、仲居さんが細々こまごまとした準備をしてくれる。それが終わると、「何かございましたらお呼びくださいね」と感じのいい笑顔を向けて去っていった。

「わあ、すごいお料理……」

色々な京料理がテーブルに美しく並べられている。芸術的で食べてしまうのが勿体ないくらいだ。滅多に食べられない豪華な料理に、恥ずかしながらも身を乗り出して興奮してしまう。

目の前には豪華な料理と素敵な男性。今日会ったばかりにもかかわらず二人きりでディナー。

そう、旅館の部屋で二人きり……二人きり!?

「はい、芽衣子さんどうぞ」

「わっ、は、はい!」

お猪口ちよこを渡され、熱い日本酒がそこに注がれた。

「乾杯」

「か、かんぱい……」

部屋に男女で二人きり——これって、その……色々とマズイ状況なのでは？

もしも彼が、会話以上のことを望んでいたら……ど、ど、どうしようっ!?

私は今さらながらに梓さんが懸念していたことに気付いたのだった。

旅館で食事をしようと誘ったのは私——もしかなくとも尻軽女だっと思われている可能性が……

「おいしいですね」

「えっ？」

オイシイ？ この状況が？

「食べないんですか？ 茶わん蒸しは温かいうちに食べた方がいいですよ」

「茶わん蒸し？ あ、はい！ 食べます……」

慌てて口に運ぶけれど、緊張していて、味がわからない。

——けれど、その緊張は美味しい料理とお酒が進むにつれて緩んでいった。

ふわふわしていて心地が良くて、すべてのことが楽しくなってくる。

そうなれば、私の口も軽くなるわけで……

「だって、白馬に乗った王子様ですよ！ 誰もが一度は憧れると思うんです！」

「うん、俺も乗る馬が白馬だと自分が特別になった気がするよ」

「でしよう！ そうでしよう！」

完全に酔っぱらった私は、白馬の若様である梓さんに理想の王子様について熱く語っていた。テーブルに並んでいた料理はほとんどなくなり、進むのは必然的にお酒だけ。

「実は私、白馬の王子様がいるんじゃないかって思って、乗馬クラブに見学に行っただけなんですよ！」

「へえ、そこに王子様はいたの？」

「それは、まあその……」

教えて、と梓さんがやわらかい眼差しで私を見つめる。

「うっ……えっと、私、運動神経悪くて……それに勇気もなくて。でも、もういいの、だってこうして京都で白馬の王子様に会えたんだもん。あ、違う。殿様だったっけ？」

「まったく、あなたって人はもう……」

いたずらっぽく言えば、梓さんは照れたように頭を掻いた。

微笑みを湛^たえて話す彼の物腰は柔らかい。許されるのならば、彼をずっと見ていたい。微笑んでいてほしい——私だけに。

そう思ってしまうのは、私の中で芽生え始めている何かのせいなのかもしれない……
何かって何？ と聞かれれば——アレとしか答えられない。

でも遠距離恋愛はきつとできない。私はそつとため息を零^{こぼ}した。

もう二度と、報われない恋愛はしたくない。だから、こうして楽しいひとときを過^こすことができるのなら、それだけでいいと思う。

ほら、目の前には男前がひとり。うん、最高！

「急に黙ったかと思ったら百面相？ どうしたんです？」

「べ、別になんでもないわ。ただ、今がすごく楽しくて……」

変な表情をしていたらしい顔を俯^{うつむ}かせて、私はお猪口^{ちよこ}をきゅつと握った。

「そう……それで、芽衣子さんは、どんな王子様に憧れているんですか？」

梓さんが空になった私のお猪口にお酒を注ぎ足しながら尋ねた。

私は暗くなりつつあった気持ちを切り替え、唇に指を当てて考え始める。

私の憧れている王子様は——

「そうね、優しくて気品に溢あふれていて、物腰柔らかかでレディファーストが嫌味なくできて……こんな年だけど女性扱いしてほしいし、めいっぱい甘えたいでしょう？ お姫様だつこにだって憧れるし、手の甲に口づけされてプロポーズもされたいじゃない」

「な、なるほど……」

「あ、でも違うのよ。我儘わがままを聞いてほしいって言ってるんじゃないの。呆れないで受け止めてほしいだけ。だって女はいくつになってもオンナノコなのよ。それから、なんてたって譲れないのは白馬よね！ 白い馬に乗って迎えに来るの！ 一目見たその時から、二人は恋に落ちるの……ううん、ちがう。出会うべくして出会うのよ！」

ああ、ヤバイ。なんか私、饒舌じょうせつすぎる……というか意味不明かも。引かれる前に理想の王子様トクを終わらせなければ。

私はお猪口ちよこに残っていた日本酒を一気におおつてから、パン、と手の平を打った。

「さ、つまらない話はやめましょう！ ところで梓さんは——」

「そのお姫様は、王子様と恋に落ちてめでたしめでたし、ですか？ 芽衣子さんはそんな出会いに憧あこがれるの？」

どうやら途中で終わらせる気はないらしい。

私の空になったお猪口に、再びお酒がみなみと注がれた。

「まあ、そうだけど……。でも、物語の中ではハッピーエンドでも、現実はその簡単にはいかない

でしょう？ だって二人が出会ってすぐ両想いになるとは限らないじゃない。お互い一目惚れだなんて、雀の涙ほどの確率だし。だからただの夢なんです」
そう、自分が一目惚れでも、相手がそうだとは限らない。結局はただの理想であって、現実はずうのだ。

「ねえ、この話はもう終わりに——」

「それじゃあ、その王子も実は一目惚れだったりしたら？」

梓さんは、ぼんやりとしていたら聞き逃ぬかしてしまっいそうなほど小さな声で言った。意味がわからず、目をぼちくりとさせる。

「……え？」

「俺は芽衣子さんの王子様になれる？」

今度はもう少し大きな声で言う。彼の口調は、落ち着いてとても穏やかだった。でも、そこに嘘うそやからかいは微塵みじんも感じられない。

「な、なれると……思うけど……」

その言葉に真実はどれくらい割合くわがひで含まれているのだろうか。私は俯うつむき加減で梓さんを盗み見た。「初めて会った時から、あなたを目で追っていました。明るくて、元氣な人だなんて思っていて、話をしてみたいなど……」

ほのかに耳を赤らめた梓さんが言った。

「——つと、突然ごめん、迷惑ですよね」

「そ、そんなことない！　すごく嬉しい、です……だつて私なんか梓さんを白馬の王子様と勘違いしたほどだし、そ、その、今日だけじゃなくて、また会いたいなって思つて……」

そんなことを言われるなんて思いもしなかった。でも、遠距離恋愛は……

「それじゃあ、東京に帰つても会つてくれますか？」

「はい、もちろん——え？　帰るつて、梓さん東京出身なんですか？」

そうですね、と彼は微笑んだ。

「じゃあ、えつと……」

心臓がドクドクと自己主張を始める。それは私に、正直になれ、と言っているようにも思えた。

「わ、私……」

目の前の梓さんを見つめる。はにかむように微笑む彼に、私の体温は少しずつ上昇し始める。

ねえ、これつてもしかして、もしかする？

出会つてお互い一目惚れで両思いなんてことが、本当にあると思つ？

「私——」

「失礼します。そろそろお食事のお片付けをしましょうか」

気配もなく引き戸の外側から声をかけられ、私は驚いて飛び上がりそうになった。そつと戸が開き、膝をついた仲居さんが姿を現す。

「ささ、お片付けが終わりましたらお布団敷きますから、その間にお風呂へどうぞ」

ここは露天風呂が自慢なんですよ、と笑顔で言いながら、仲居さんは押し入れ横のクローゼット

から置まれた浴衣セットを取り出し、私と梓さんに手渡す。

彼は受け取つた浴衣セットをじつと見つめ、それから私に視線を向けた。

「芽衣子さん、泊まつてもいいですか？　もちろん嫌なら断つてください」

息を吹きかけるように、私の耳元に声を落とす。

期待に背筋がぞくりと震える一方で、頭の中の冷静な部分がガンガンと警鐘を鳴らしていた。

旅先で出会つたばかりの男と一晩過ごしたらどうなると思う？
騙だまされているだけじゃないの？

私は、自分からこの人を部屋に呼んでしまったのだ。簡単にやれるつて思われていても不思議じゃない。

「えつと……あの……」

それに、梓さんが東京出身だつていう証拠もない。若宮梓というのが本名なのかも、彼が独身なのかさえわからない……

私はそれだけこの人のことを知らないんだ。

「……すみません、やつぱり帰りますね」

梓さんは、少し寂しげな表情をしてから微笑み、視線を逸そらした。それを見た私は、咄とつ嗟さに口を開いていた。

「ま、待つて！　嫌じゃないですつ！　もう少し……一緒にいたい……です」

浴衣をクローゼットに戻そうとする彼の腕を掴んで、私は小さな声を絞り出したのだった。

入浴を終えて部屋に戻ると、梓さんは障子を開けたところにある広縁ひろえの椅子に座り、頬杖をついて外の景色を見ていた。何を考えているのか、窓に映った彼は無表情だ。

私にしては大急ぎで髪や身体を洗ったけれど、それでもかなり待たせてしまったのか、背の低いテーブルにはほとんど残っていない冷酒の瓶びんが置いてあった。

そして、部屋の真ん中には二組並んで敷かれた布団……それを見ると、自然と鼓動が速くなる。

「芽衣子さん、そんなところでどうしたんですか？ こっちにおいで」

そう言われて初めて、自分が入り口の引き戸を開けたまま、ぼうつと突っ立っていたことに気付いた。

「あ、うん……」

梓さんは何を考えているのだろうと思いつつも、私は彼の向かいの椅子に座ろうとして――

「きゃあっ」

不意に腕を引かれ、次の瞬間、私は梓さんの膝の上に行った。

「ははっ、驚いた？ こっちにおいでって言ったのに、向かいの椅子に座ろうとするから」

「だ、だって……」

普通はそう思うじゃないの、と頬を膨らませたけれど、梓さんは笑みを深めるだけだった。

彼の短くて黒い髪はまだ湿っているらしく、全体的につんつんと無造作にはねている。

浴衣姿が何とも艶あでやかで、昼間に見た袴姿はかますがたとは違った男らしさを感じさせた。しかも、色つぼさ

まで加わっている。

「芽衣子さん、髪の毛がふわふわですね」

「そうよ。癖が強いから、ちゃんと乾かさないといけないの。雨の日はもつと大変なんだから。結ばないと、もう大爆発！」

私の髪は天然パーマだった。しかも髪質は細く、扱いづらい。

毎朝、一生懸命ブローをしても、雨が降ってしまったえば早起きの労力は一瞬にしてなかったことになってしまふ。この髪のおかげで雨の気配を感じることが出来る私は、まるで人間天気予報だと言われるほど。……そんなあだ名なんて、嬉しくもなんともない。

「ポニーテールもかわいいよ。知ってる？ 襟元から覗くうなじがすごく色っぽいだ」

髪を結った私を知っているような言い方に、私は首をかしげた。

「でも、お風呂上がりにしか見られない、このふわふわもかわいい」

「ふわふわって、ボサボサの間違いじゃない？ 私はあまり気に入ってないんだけど」

「そんなことないよ……」

じっと見つめてくる瞳。彼の温かい手の平が、私の腰から背中にとっと移動する。

「芽衣子さん、いい匂い……」

「お、お風呂上がったばかりだからね……」

梓さんは私の首筋に顔を近づけて息を大きく吸った。

「芽衣子——って呼んでもいい？」

突然の呼び捨てに、私の頬が急速に発熱する。

「う、うん……」

頷くと、背中に回された腕に力がこもった。温かくて心地良い圧迫感に、私は彼の肩にとんと頭を預ける。

私と同じ石鹸の香りは、大浴場に備え付けられていたもの。そこにかすかに混じっているのは——彼の持つ、彼自身の香り。

それを楽しむように、私は大きく息を吸った。夢心地で目を瞑っていると、肩を掴まれ、引き離されてしまう。

せつかく香りを楽しんでいたのに、と梓さんを見れば、彼は私の唇を熱い眼差しで見つめていた。

「キス、してもいい？」

「えっ？」

そう言われると変に意識してしまう。私は恥ずかしくなって目を伏せた。頬がじわじわと熱くなる。

「芽衣子、かわいい」

私の頬にそっと手を添えて、梓さんは優しく唇を重ねた。

触れ合うだけのキスはほんの数秒で終わった。それだけでは物足りなさを感じる。

どうしてもっとしてくれないの——？

そう思いながら彼の額にコツン、と自分の額を当てる。私からキスをすれば、きっとこの思いが伝わるだろうけど、変な気恥ずかしさからどうしても行動に移せない。

「もっど？」

私の思いに気付いた梓さんは、親指の腹で私の下唇をなぞり、もう一度、ゆっくりと顔を近づけてキスをする。下唇を食むような口づけを繰り返したあと、歯列を割って、熱い舌がゆっくりと侵入してくる。

「んっ……」

しばらく舌の動きに翻弄されていたけれど、いつの間にか私も彼の動きに合わせるようにして舌を絡めていた。

「芽衣、子さん……芽衣子、さん……」

口づけの合間に囁かれる甘い声は、余裕がないのか先ほどまでと違って呼び捨てではなかった。それが私の身体に甘い痺れを与えていることに、きつと彼は気付いていない。

角度を変えながらの深い口づけが続き、だんだんと呼吸が疎かになる。この息苦しさまでもが心地良いと感じてしまうのが不思議だった。

「ん、んっ……」

キスが激しくなるにつれ、私の身体の内側が少しずつ変化し始めた。それは久しぶりに感じる——下半身の甘い疼き。

内股を擦り合わせるように身じろぎをすれば、梓さんがびくつと反応して唇を離す。

「あ、ずさ……さん？」

「ごめん、もう少しこのままです、と思ったけど、我慢できそうにないみたいだ」

「え……？」

ふと我に返れば、ちょうどお尻の下に何か硬い物が当たっていた。これはひよつとして……

「や、やだ、私……ごめんさい！」

私が動いたせいで刺激を与えてしまったらしい。

急いで梓さんの膝から降りようとしたけれど、その前に彼の腕が私の膝裏と背中に滑り込み、ひよいと抱え上げられてしまった。

「はい、捕獲成功！」

いたずらっぽい笑顔のまま立ち上がり、布団へと歩き出す。

夢見ていたお姫様だつこに、私は黙って梓さんの首に腕を回して抱きついた。

梓さんは私を敷布団の上に下ろし、再び唇を塞いだ。ついばむような甘いキスと、絡め取るような深いキスを何度も繰り返され、呼吸のタイミングがわからなくなってきた頃にやっと解放される。

息を整えようとする私に、梓さんは、耳たぶ、頬、首筋、鎖骨と順番にキスを落としていく。

背中にぞくぞくと走る甘い痺れは、私をどこかへ連れていってしまうような気がした。

「いいかな？」

「……え？」

何が？ と、疑問を口に出す前に、梓さんは浴衣越しに私の胸を優しく撫でて、襟の合わせに手をかけた。そして――

「ひゃあっ」

浴衣が下ろされ、はだけた胸元から下着が露わになる。

「あ、梓さん!？」

「ふふ、なんだか悪いことをしているみたいだ……」

梓さんは私の浴衣を半分ほど脱がしたところで手を止めて言った。確かに、洋服よりも浴衣を脱がされる方が恥ずかしく感じてしまう。

露わになった私の鎖骨に梓さんは唇を這わせながら、点々と桜色の花びらのような痕を落としていった。二の腕の途中まで下ろされた浴衣が私の両腕の自由を奪っている。

「ねえ、この状態……やだ……」

「どうして?？」

「どうして……」

わかっているくせに、わざと聞いてくるあたり、意地が悪い。

「顔が真っ赤だ、すぐくかわいい……」

「ひゃ、あっ」

囁きを落とされ、耳たぶを優しく噛まれると、口から自然と声が漏れた。

「直接触ってもいい?？」

そう囁くと、彼は胸の谷間に唇を這わせながら、手の平に収まるほどの二つの丘に触れ、やわやわと愛撫を始めた。

「あっ、ん……」

「その声……誘ってるみたいだ」

声を漏らした唇が奪われるように塞がれる。梓さんは背中に回した手でブラジャーのホックを外した。

ぴんと尖った突起が冷たい空気に触れ、かと思えば温かい手の平で包まれ、舌で転がされる。

「ああっ、んっ……」

甘美な刺激にぴくりと反応し、思わず喉を反らす。肌をくすぐる短い髪にも感じてしまうほど、私の身体は敏感になり、そして貪欲に刺激を求めていた。

「お、ねがい、待って……」

身体が熱くてどうにかなりそうだった。それでなくても両手が思うように動かない。

彼に触れたいのにできない。それがすごく、もどかしい。

「ごめん、待てない……」

けれど、梓さんはそんな状態を知ってか知らずか、恍惚とした笑みを浮かべながら胸の突起を吸い、軽く歯を立て、もう片方の尖った中心を指の腹で擦った。

温かさ甘い刺激の両方を受けて、私の下腹部がきゅん、と疼き始める。

「ああんっ、や、だめっ……ず、るいっ」

「じゃあ、どうしてほしい？」

「っ……」

全部脱がせてほしい……けれど、そんなこと口に出せない。

「はい、時間切れ」

裾が捲られて、太ももをそっと撫でられた。その手が私の膝を割るように入して侵入し、刺激を待ち望んでいた突起に、薄布の上からそっと触れる。

「はあ、んっ」

「ほら、身体は正直みたいだよ？ もう濡れてる……」

下着がするりと脱がされ、同時に足を大きく開かされる。

「や、恥ずかしい、から……」

「恥ずかしいながら感じる芽衣子を見たい……」

疼く蕾をちゅつと音を立てて吸われ、熱い舌先でくすぐられる。彼の短い髪の毛が、その動きに合わせて私の内腿をくすぐった。

「やう、だめ……あずっ、ああっ」

新たに与えられる刺激に爪先がぴんと伸びる。

「芽衣子、もうとろとろだよ……指、挿れてもいい？」

答える前に、入り口を割って彼の長い指がゆっくりと侵入してきた。すでに潤んでいたそこは、くちゅくちゅと蜜を滴らせながら難なく彼の指を受け入れる。彼の指先が、もどかしいほどにゆっくりと体内で動いた。

「あ、んんっ、ああっ！」

甘い痺れに、私は思わず腰をくねらせた。

「気持ちいい？ それとももう一本？」

「やあつ、んっ」

「そう、じゃあご希望どおりに……」

二本の指が侵入し、中で動き始める。その指がある一点に触れると、腰がぴくりと跳ねた。

「あ、ん、だめ……んんっ」

「かわいいよ、芽衣子」

一定のリズムで刺激を与えられ、私の中で次第に何かが昇り始めていく。だんだんとスピードを上げる快楽の波に背中がぐっと反る。

もう、何も考えられない——

「んんっ、あ、ああつ！」

昇りつめたものが、一気に解放された瞬間だった。

「あ、梓、さん、私……」

身も心もとろけてしまいそうな余韻に浸りながら、短く息を吐き、梓さんを仰ぎ見た。

「浴衣が乱れていて……ものすごくそそられる」

彼は、眩しそうな顔で私を見下ろしていた。

「見ないですよ……」

私は力の入らない腕で乱れた胸元を隠す。

「ほら、その見えそうで見えないのがすごくいい。恥じらう仕草が色っぽい……芽衣子は男をその

気にするのが上手いのかな」

「もう……変なこと言わないですよ、それでなくたって……」

ただでさえ、私はひとり乱れ、与えられる快楽に溺れてしまったのだから。

「本当に……いけないことをしているみたい。俺、悪代官にでもなった気分」

「そのとおりじゃない！」

くつくつと笑い、梓さんは私の胸元に再びキスを落とす。そして汗ばむ肌につつつ、と唇を這わせながら、腰でリボン結びにされていた帯を解いた。

中途半端な恥ずかしい格好からは解放されたものの、一糸まとわぬ姿もまた恥ずかしい。

彼は浴衣と身につけていた下着を素早く脱ぎ捨てると、いつの間にか用意していた避妊具の袋を開け、素早く装着した。

「……いくよ？」

私の膝を折り、びたりと熱いものを当てて、次の瞬間——

「ああつ」

私の体内に、梓さんが深く、強く刻まれた。

梓さんはじれじれするほどゆるやかに動き始めた。一度引いたはずの快楽がゆっくりと舞い戻ってくる。

「芽衣子の中はきついな……でも気持ちいい。ずっとこのままでもいい」

「わ、私も……」